

語りが世界をつむぐ

難波 美和子 (比較文学)

1 昔話の体験

昔話を語る、そして昔話を聞く。昔話の「本来的」とされる経験は、身体的な場にある。昔話の語り手は、自分の声で、目の前にある聞き手の表情、息遣い、合いの手などに呼応しながら、話を語る。聞き手は、語り手の声だけではなく、表情や間をも同時に受け取る。語り手と聞き手は、彼らを包み込む空間と時間を共有する。そこには、さまざまなにおいや、音が存在する。その経験は一回限りのものである。現在では、その場の音声も映像も記録することができるが、その体験はその場に集った人々それぞれのものであり、それぞれの記憶の中にしか存在しないものだろう。昔話の聞き手が語り手に転換するとき、かつて聞いたときに心に浮かんだ情景が思い浮かぶと言う証言も存在する¹。昔話は身体的な経験として伝承されるものであったといえるだろう。

しかし、語られる昔話は身体的な経験とは別のものである。昔話は身体的な現実感を語らないとされる。「昔話は残酷か」という今では言い古された問いかけがある。その解答としては、マックス・リュティがヨーロッパの昔話について提唱した、「昔話の様式」における平面性が日本も含めて多くの昔話の語りにおいて有効だと考えられている²。昔話が語られるとき、登場人物も物も、内面をもった立体的な存在ではない。「切り紙細工」のようなものという比喻が使われているが、切り紙細工ほどの実態ももたない。語り手と聞き手の間で消えてしまう音によってだけ実体化する。それはきわめて明瞭な言葉によって表現されることで、はっきりとイメージ化される。したがって、昔話は残酷な行為を語ることがあるけれども、残酷に語ることはない。「おおかみは、あかずきんちゃんのおばあさんを、ひとくちでたべてしまいました」その状況はきわめてショッキングだが、語りは簡潔で、具体性に欠ける。「狼がおばあさんの喉笛に嘯み付き、息の根を止め、腹を食い破って内臓を引きずり出す」のは文学であって、昔話ではない。ただし、近代の文学の

洗礼を受けた後の聞き手は、「平面的」な語りにおいても、「リアリズム」を読み取ってしまいかねない。

昔話は語られる場かぎりの切り詰められたことばによって、語り手と聞き手が共有するイメージによって成立するものとしてあった。昔話の語りは、言語を抽象化の手段として利用し、有効に活用してきたのである。昔話においては、日常的な行為ほど、誇張や差異化によって、身体的な感覚を失い、非在化してしまうように見える。後に残るのは笑いである。昔話に限らず、笑いは言語の意味の過剰によっても、無効によっても引き起こされる。

2 記号化されたモノとコト

昔話が音声による表現によって磨き上げられ、伝承されてきたということを、文字や映像による記録に慣れてしまったわれわれは、繰り返し確認する必要があるだろう。音の類似による意味の取り違い、音声から意味を類推することができないことによる勘違いは、昔話に頻繁に利用されている。「古屋の漏り」は絵本で読んでも面白い話だが、「とらのおおかみより、ぬすびとより、ふるやのもりがこわい」という貧しい老夫婦の感慨は、音声によって「ふるやのもり」の意味が無化して漂うことによって、「とらのおおかみ」と「ぬすびと」の間で得体のしれない怪物となる。もちろん、聞き手は、同時に「古屋の漏り」という意味をも理解していなければならない³。

「ふるやのもり」は意味が浮遊しているだけだが、「宝化け物」「化け物寺」では、攻撃的な化け物になってしまう。これは古物に霊が宿するという民間信仰が説話化したものとされるが、古物であることに加えて、名前の意味が空洞化したことで化け物になったとも考えられる。その名乗りの意味が解釈され、意味が与えられることによって、化け物たちは消滅を余儀なくするのである。

山寺でつぎつぎに住職が化け物に食われてしまい無住になった。ある時、旅の僧侶がこの寺で一夜の宿を借りた。夜中に「トウノノバトウ」「サイチクリンノケイサンゾク」「ナンチノリギョ」「ホッコボクノコ」などと名乗る化け物がやって来る。それらを僧侶は「東野の馬頭」「西竹林の鶏三足」「南池の鯉魚」「北枯木の狐」と解いて正体を暴き、退散させる。翌朝、それぞれの正体を退治し、山寺の中に巣くっていた化け物の正体も明らかにして、この僧が山寺に住むことになる。⁴

山寺の妖怪たちの存在感は音声言語に保証されている。

昔話の言語操作は、意味のない音声に意味を与えることもする。極めて多様な話群を擁する「和尚と小僧」のなかに、小僧が和尚が隠している食べ物をごっそり食べてしまう、という話型がある。小僧は盗み食いを寺の本尊の金銅仏のせいにする。金銅仏が発する本来は無意味なはず音が、ここでは和尚と小僧に言語として解釈される。

和尚が隠していたぼたもちを、和尚の留守に食べてしまった小僧は、重箱に残った餡をご本尊の口元に塗りつけておく。帰ってきた和尚がぼたもちがないことに気づき、小僧をしかると、小僧はご本尊の口にぼたもちがついているから、食べたのはご本尊だと言う。和尚がご本尊を叩くと、金銅製なのでクワンクワンという。小僧がご本尊を水責めになると、クッタクッタといいながら水に洗んだ。

「和尚と小僧」の話群は、ナンセンスを多用するが、この「ぼたもちの本尊様」は意味の過剰な読みによる笑いといえそうである。

逆に、ことばの含意や比喩的用法を無視することによっても笑いが発生する。「とんち者」や「狡猾もの」は、複数の意味を承知の上で、文脈を無視して特定の意味に解釈してみせる。「ちゃのみ」は「物知らず」の話型にも、「とんち者」の話型にも登場する記号である。とんち話では、殿様が「良い茶の実を持って」と命じたのに対し、殿様からのさまざまな要求に閉口したとんち者が「村一番の茶飲み婆」を差し出す。いわゆる「愚か者ばなし」には、ことばの意味を知らない、または物を知らないほかに、常識的な用法、比喩的な用法を理解しないことで起こる失敗がある。

母親が仏さんの命日に供えようとした甘酒を、ばか息子に飲まれまいと二階になおしていた。母親が甘酒の瓶をおろそうとばか息子を呼んで、「尻をかかえててつだえ」と言うと、ばか息子は自分の尻をかかえこんだので、甘酒はひっくりかえり、瓶は割れてしまった。

この息子にとっては「尻」とは身体上の尻しかありえないのであって、「尻状の形態」のもの、「位置的に下部にあるもの」といった含意はない。ことばに複数の意味や、裏表は存在しないのが、彼の言語世界である⁵。この話群では、愚か者は「魚を見張っていよ」と言われれば、ただ見張っている。猫が来て魚をくわえても、見張っているだけ

で追うことはしない。意味の連鎖が起こらないのである。聞き手が、そのことばが持つ意味の広がりを理解していることによって笑いが発生する。

3 ことばによる身体感覚

昔話において、ことばは、意味の過剰と意味の無効化の間で働く。語りの様式が、平面性や極端さという特徴をもち、登場人物や物は、リアルな実体を持つものではない。したがって、具体的な行為や表現は必ずしも身体的な経験を反映しないと考えられる。実際、語りが十分に反映しているとみられる昔話の中から、現実的な身体感覚の表現を見出すことは難しい。それでも「食べること」「排泄」「性行為」といった生理的な行為には身体感覚が現れないだろうか。しかし、昔話では、語り手は身体の意味の過剰な読みや誇張によって、様式的に語る。

「食べること」は食欲の反映というよりも、文化的な意味の行為である。昔話における食の意味は、「儀礼食」に関する作法や特別な食物を知らないこと、食べ物を独占することなどに現れている。食物の独占も、食欲の問題ではなく、社会的約束事に関わる意味の領域なのだ⁶。

排泄行為の中では、昔話で重視されているのは「放屁」であるらしい。「へやの起こり」または「屁ひり女房」という話型の面白さは、生理としての放屁が極端に誇張された表現にある。ここでは屁という生理の実際はどこかへいってしまっている。

ある男が嫁を迎える。ところが、日が過ぎるに従って、嫁の顔色が悪くなる。姑が心配して理由を尋ねると屁をがまんしているという。姑が我慢せずにしろというと、嫁は姑に大黒柱にしっかりとつかまれとって、屁をする。その屁の大きさは、家中のものを吹き飛ばし、あやうく姑を吹き飛ばすところだった。そのことを聞いた男は嫁を実家に帰すことにする。送り返す途中、茶屋のそばに梨の木が沢山の実をつけていた。嫁はそこで休んでいた商人たちと、一度で梨のみをすべて落とせるかどうか賭けをして勝ち、大金を手に入れる。感心した男は嫁を帰さないことにし、家に一緒に帰る。家に嫁が屁をするための一間を作ってやった。それが「へや」の起こりだ。

「屁屋＝部屋」の落ちは言葉の意味をずらすと同時に、この嫁の屁の威力も抑制してしまう。この屁は嫁にとってはしなければ済まないものではあるものの、排泄行為というよりはとてつもない「呼吸」と言えそうだ。屁の意味を無効化しながら、その排

泄行為という側面へひっくり返す効果を持っているのが「屁較べ」の話だ。

薬屋と呉服屋と酒屋の奥さんが集まって遊ぶ。屁の出し比べをすることにする。薬屋の奥さんは「チンピ（陳皮）」、呉服屋の奥さんは「シュス（縞子）」、酒屋の奥さんは「シンシュ（新酒）」と出す。二回目はもっと強くということで、薬屋と呉服屋の奥さんはそれぞれ「ブクリョウ（茯苓）」、「ドンス（緞子）」と出した。酒屋の奥さんはなかなか出せずとうとう本物が出た。奥さんは「もろみが出ました」と言った。

上品な奥さん方が屁をくらべることがまず笑いを引き出すのだが、なかなか器用にきれいな屁である。それぞれ家業の意味を屁に持たせて、最後に「本物」が出てしまっても、「もろみ」と言い収める。酒屋にとってはもろみが出るのは「言葉祝い」であろう。実態としての屁や「本物」の意味はここにはない。社会的規制からの逸脱としての「放屁」という記号だけが機能している。

社会規範としての放屁の禁止は、「屁ひり嫁」にも見られるように、その不可能性として昔話の中で語られる。笑い話ではないが、放屁の禁止が重要モチーフとなっている話型に、奄美諸島や沖縄で多く採集されている「金のなる木」がある。

城主の妻が夫の前で放屁する。城主は怒って妻を追放する。妊娠していた妻は追放先で男子を産み、育てる。成長した息子は母が追放された理由を知り、父の納める城下へ行く。息子は城主に黄金の実が成るカボチャの種を売ろうと言う。ただし、生まれてから一度も屁をしたことのない人物が植えなければならないと。城主はそんな人間はいないと言う。そこで、「では、なぜ私の母を追い出したのか」と問いかける。過ちを悟った城主は妻を呼び戻し、息子を跡継ぎにすえる。

社会規範で人間の生理的反応を規制することの不可能性を語るために、極端な行為が取られる。感覚的には理解しやすい不適切な場面での放屁が、重大な違反として過剰な意味を与えられる。ここでは滑稽な悲劇の様相を呈するが、子供の理屈が偏狭な父親をやりこめることで、めでたい結末の契機となる。

放屁は社会規範としては禁止の対象である一方で、意味の付与が可能な場合はめでたいものとして笑いの対象になっている。音であるため、言語化してしまうのである。この笑いは、性に関わる笑いと対照をなしている。ただ性器をむき出しにす

ることも、昔話に限らず笑いを引き起こす。「鬼婿入り」または「鬼の子小綱」の中で、鬼の家から逃亡する父と娘（とその子）が、川の水を飲み干そうとする鬼に向かって娘が船の上で腰巻をめくって尻を見せると鬼が笑い、川の水を吐き出してしまふ。そのおかげで逃げることができた。性に関わる笑いは、性器そのものを見せることのほか、語りによる性器の誇張や形状への言及でひきおこされる。そのほか、しばしば、性の行為に無知なことが笑いの対象となる。性器を露出することや誇張することは、実際の身体性よりも豊穡儀礼との関わりも考えられる。性行為に無知な話は、性教育の側面も持つかもしれない。しかし、性に関わる話の意味は、語りの場や、語り手と聞き手との関係にも一層の考察が必要であろう。

最後に身体の実験が意味のずれを引き起こすことで起こる笑い話を紹介してこの稿を終わりたい。言語の認識と身体的な記憶は強い結びつきを持つと思われるが、その契機に誤りが起こると言語の意味が間違ってしまうことは昔から認識されていたようだ。

少し足りない婿が嫁の里でだごをよばれる。あまりうまかったので、帰ってつくつてもらおうと「だご、だご」と言いながら戻ってくると、大雨上がりで向こう岸へ跳ばねばならなかったで、「へんこれさ」と言って跳ぶと、「へんこれさ」になる。帰って嫁に「へんこれさを作れ」と言うがわからない。夫婦げんかになり、火起こし竹で殴ると、嫁の頭にこぶがで、「だごじゃにゃあか」と嫁が言い、婿は「ああ、だごだご」と言った。

-
- 1 たとえば、『鈴木サツ全昔話集』（鈴木サツ全昔話集刊行会、1993）、p.373.
 - 2 マックス・リュティ（小澤俊夫訳）『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社（1969）。昔話の平面性や抽象的様式の日本の昔話への適用については、小澤俊夫『昔話入門』ぎょうせい（1997）を参照。
 - 3 「古屋の漏り」の概要と広がりについては、拙稿「トリックスターの旅」『文彩』（第1号、2005年）に既述。
 - 4 『日本昔話事典』「化け物寺」の項と、『日本昔話通観 第24巻 長崎・熊本・宮崎』「山寺の怪」による。以下の昔話の梗概はすべて『日本昔話通観 第24巻』による。
 - 5 言葉を文字どおりに理解することで周囲との摩擦を引き起こす主人公の造形は、発達障害の事例にも見えるが、ここでは、語りの様式として理解しておく。
 - 6 拙稿「昔話に見る「食」」『文彩』第5号（2009）pp.54-48参照。